

50のイナん!

#8

MISAO STRIKE BACK!!

著: 藍澤たすく

イラスト: かもめ遊羽

らのけんってどんなお話?

三郷^{みさと}学園高校「ライトノベル研究部」

——通称らのけん。

それは世にあふれるラノベを読みまくり、また自らも書きまくり、総合的にラノベへの造詣を深めることを目的とした志^{こころ}しの高い部活動……。のほ、なんとだけれど……。アレ? 実際フタを開けてみたらなんか思ったよりゆるくない?

だがしかし! それこそが「らのけん」の魅力! という感じで展開するまったく系日常部活コメディなのです!



緑川萌

ラノベと動物をこよなく愛する素直でまっすぐな女の子。その直情径行さゆえに突っ走ってしまうことがあるのはご愛嬌。



白井華子

らのけん顧問教師……。のほ、見た目が一番幼いのため、部員からも「華ちゃん」と呼ばれ親しまれる癒し系な存在。覆面ラノベ作家一条れんととしても活躍中!



赤城操

クールビューティーな眼鏡っ子。微に入り細を穿つ綿密な設定作りには、らのけん内でも定評がある。校正能力もプロ並み。



黒田美玖

愛情表現がセクハラチックなボーイッシュ女子。いつもそのターゲットにされる華子の苦勞は、推して知るべし。何気にミステリラノベ好き。



紺野司

ラノベ作家としての華子、つまり一条れんを担当する編集者。AG文庫編集部に所属。天然な華子の創作活動を、陰に日向に支えてくれる心強い存在。



青山一斗

らのけんの黒一点。なんにでもすぐに首を突っ込みたがる好奇心旺盛な性格の持ち主。

「「華ちゃん、おめでとー!!」」

盛大なクラッカーの破裂音と共に、紙吹雪が華子の部屋中に散らばった。

「うわー、みんなありがとー!!」

紙吹雪の中心に座っている華子は本当に嬉しそうに満面の笑みを浮かべた。

その前に、でん、と置かれた大きなデコレーションケーキの上には「祝・作家デビュー!!」と書かれたチョコプレートが乗っている。

そう、今日はラノベ作家デビューを祝って、三郷学園高校ライトノベル研究部——通称・らのけん——の皆が集まってくれたのだった。

「それはそうと……」

華子はそこで言葉を切って上目遣いに萌を見た。

「今日は赤城さん……来ないんですか？」

「あー、赤城は家の用事があるから無理ぽとか言ってた」

一斗がスマホをいじりながら、特に興味なさそうに返事をする。

「そう、ですか……」

華子はちよつと寂しそうにテーブルの上に目を落としたり。

「どったの、華ちゃん？」

急に元気をなくした華子を心配して萌が顔を覗き込む。

華子は何やらしばらく躊躇ためらっていたが、やがておずおずと口を開いた。

「あの……もしかしてあたし、赤城さんに嫌きらわれてませんか？　なんか最近すごい冷たくされている気がするんですけど……」

「……………」

華子の言葉に萌、一斗、美玖の三人は顔を見合わせる。

「もしかしてあたし、気がつかないうちに赤城さんになんかしちゃいました？　傷ついたりしちゃいました？　顧問教師的にはすごく、すごく気になるんですけど!?」

華子が目を潤うるませて3人に問いかける。

「あはは、なんかって……なあ?」

「なんかって……ねえ?」

一斗と萌が苦笑いで顔を見合わせる。

「なんですか〜!?　何か心当たりがあるなら教えて下さい〜!」

「心当たり、ねえ……」

心当たりなら、ある。

すごく、ある。

先日、華子が酒（※正確にはウイスキーボンボンひと粒だけど……）に酔って、赤城が大切に書き溜めていたエクスタリカの設定集を、横よこ難なぎにして部室中にばらまいた1件だ（※G A

文庫マガジン2014年7月24日配信号掲載「らのけん!」第一話参照。

結局華子が酔いつぶれて寝ている間に、部員総出で散乱した原稿用紙を拾い集め、事なきを得た（はずな）のだが、自身の設定厨せいでいろうぶりを、華子に厳きびしく否定された赤城みさお操は多少なりともそのことを根に持っているかもしれない。なかった。

ただ問題は肝心の華子がそのことを……酒に酔って自分がやらかした所行しよぎょうを……まったく覚えていないということだった。

「ねーねーねー、なんですかーやっぱり心当たりあるんですかー?　教えてくださいよー、

ねーねーねー!」

「……………」

どう応こたえていいのか判らず、沈黙ちんもくを守る萌と一斗。

やがて。

「それは自分の胸に聞いてみれば判ることなんじゃないかな、華ちゃん」

「え?」

美玖がいつになくシリアスな表情で華子に歩み寄ってきた。

「自分の胸に……ですか……?」

華子が戸惑戸まどった様子で美玖を見つめる。

「そう。そうすれば、華ちゃんがみさおうちに何をしたか、わかるはずよ」

「え？」

「だーかーらー、ここに華ちゃんのー……あ、今は一条先生か……一条先生のサインが欲しいの！」

「あっ、俺も欲しい！」

「あたしのにも欲しいんだぜー!!」

一斗と美玖もカバンからまんみーを取り出して、勢いよく華子に差し出した。

「みんな……」

華子は感無量の表情で3冊のまんみーを受け取った。

「あたし、こんないい生徒を……いえ、読者を持って、幸せです……」

華子は本をぎゅっと抱きしめて、ぶるぶると肩を震わせた。

「よーっし！ じゃあ、あたしの初サイン！ 持てる力をすべて注ぎ込んで書かせてもらいますよー！」

「あはは、華ちゃんは大げさだなあ……。……ん？」

油性マジックを持った華子が突然びたりと動きを止めた。

「どったの、華ちゃん？」

「……すみません……あたし、まだサイン考えてなかったです……」

華子は申し訳なさそうにもじもじと上目遣いに3人を見た。

「……ぶっ」

「そっか、まだデビューしたばかりだもんねー」

「華ちゃんらしいや。あはははは！」

「あう……あううううう、ごめんなさい……。……あの、これサインができるまで預かっていてもいいですか？」

「うんうん、いいよいいよ。サイン、ゆっくり考えなよー」

リビングにらのけん部員達のなごやかな笑いが満ちていく。



「でも華ちゃん、良かったねー。まんみー売れてるんでしょ？」

「はい、おかげさまで紺野さんからは今月出た新人の中で一番売れてるってお誉めの言葉をいただきましたよ！」

華子はテーブルのケーキをはむはむしながら嬉しそうに報告する。

「良かったじゃん！ じゃ、もうアニメ化とかも近いんじゃないの？」

「そんな甘いもんじゃないですよー」

一斗の言葉にそう返事をしながらも、華子はまんざらでもない様子だった。

「最初の1冊でこんなに人気がとれるなんて、華ちゃんマジ天才じゃね？」

「いえいえいえ、だからそんなことないですつてばあ〜」

「このまんまマジ100万部とかなくて、アニメ化とかなくて、大先生になっちゃったりして!」

「えへへへへ、いくらなんでもそれはないですよ〜」

そう言いながらも華子は頬を赤く染めて軟体動物のようにふみやふみやしていた。よっぽど嬉しいご様子だ。

「ほう。もう大御所気取りですか？ いい気なものですね、白井先生」

「赤城さん!」

華子の驚く声に、萌・一斗・美玖が振り向くと、いつの間にかそこには赤城操の姿があった。

操は眼鏡の奥から冷たい視線で華子を見下ろしている。

「白井先生。貴女は1年間にデビューするラノベ作家の数と、10年後に生き残っているラノベ作家の数がどれだけか、ご存じなのですか？」

「え？ ええええ?? し、知らないです〜……」

「年間百数十人の作家がデビューし、10年後に生き残れるのはたったの数人……生き馬の目を抜く厳しい戦場なんですよ、ラノベ業界は!!」

「は、はい!!」

キラリと眼鏡を光らせながら告げる操に、華子は直立不動で返事をする。

「それが！ たかだかデビュー作がちょっと売れたぐらいで！ アニメ化だの、メディアアミックスだのと浮かれています白井先生！ それでどうなんですか！ この先、この世界、ちゃんと生き残つていけるんですか!? その覚悟はあるんですか!」

「は、はい、すいませ〜ん!!」

勢いに気圧されて何故かぺこぺこ操に謝り始める華子。

「おい、赤城ちょっと言い過ぎじゃないか？」

「そーだよ、操ちゃん。今日はめめたい席なんだからそういうことは後でもいいんじゃない?」

「そっちはいけません」

操は眼鏡をきらりと光らせて一斗と萌を制する。

その有無を言わせぬ迫力に二人は思わず黙り込んでしまった。

「たといえば……このラストバトルのシーンです」

「はい?」

操がふところから付箋だらけのまんみーを取り出し、ひときわ赤くて大きい付箋の貼ってあるページを開いた。

「223 ページに『蒼い満月に照らされた寒々とした荒地……そこに6人のアニマルガール達が

ゆつくりと集まつてきた。その顔にはみな静かな闘志が湛えられている』とありますね?」

「は、はい?」

「これだから白井先生はだめなんです!」

「は、はい……えー!?」

「いいですか、白井先生? この175ページ前のファーストバトルシーンでも背景に満月が出ています! そこからこのラストバトルまでの作中経過時間は22日! となると、このシーンは上弦の月になっていないとおかしいんです!」

「じよ、じょうげん……!?」

操の思わぬ指摘に華子は絶句する。

「その他にも設定の齟齬、表現の揺れ、キャラぶれ、誤字脱字衍字などなど、様々な問題が散見されました! こちらにそれをまとめてありますので、重版分ではぜひ修正をお願いします!」

操がテーブルの上にどん! とぶ厚いレポート用紙の束を置いた。

それは余裕でまんみー3冊分はあろうかという分量だった。

「まんみーの……齟齬が……こんなに……!」

目の前に置かれたレポート用紙を前に絶望的な表情になる華子。レポートをめくる手が小刻みに震えている。これはあれだ。この世の終わりを見た人間の表情だ。

「やりすぎだよ、操ちゃん! いくらこの前華ちゃんにあんなことされたからって! これじゃ華ちゃん2巻書けなくなっちゃうじゃない!」

「そうだよ赤城! 大人げないぞ! 華ちゃんの方がずっと大人だけど、お前、本当に大人げないぞ!」

「な、なんですか! あ、あたしはただ……!」

萌と一斗のダブル口撃に、操は一瞬気まずそうな表情を浮かべ、たじろいだ。

「……ありがとうございます……!」

「「え?」」

華子の小さな、震える声があった。

振り返ると、華子がレポートの束を抱きしめて、操を見つめている。

「これだけの齟齬を調べて、書き出してくれるなんて……赤城さん、何回も何回も、深く深く、じっくりじっくり、まんみーを読んでもくれたんでしょう? あたし、嬉しいです。だってよっぽど深く読み込まないとこんな細かいところ気づけないですから……!」

「そ、それは……べ、別に白井先生のためにやったわけじゃないですからね! た、ただこんなにツツコミどころ満載の本があったら、やらざるを得ないじゃないですか! あたしはただそこに山があったから登っただけです! それだけです!」

むきになって抗弁する操に、華子は優しい微笑みを浮かべて続ける。

「それに最初厳しく言ってくれたのも、あたしの事を本当に心配してくれてるからでしょう？
 そうですね、あたし見るからに頼りないですもんね……。生徒に心配されるなんて先生失格
 ですよね……」

「白井先生……」

「でも！」

華子はきつと唇を結んで操を正面から見据えた。

「あたしは大丈夫です！ だってあたしのラノベにかける情熱は、誰にも、誰にも、誰にも負
 けませんから！ 絶対に負けませんから！」

「——！」

操ははっとした表情になった。

華子の真剣な、本気の瞳に、今度は操が気圧されていた。

「えへへへへ。あたしの能力じゃ全部は無理かもしれないけど……これは極力原稿に反映させ
 てもらいますね」

華子はレポート用紙を抱えたまま嬉しそうに笑った。

操はそれを見て思わず頬を染めてしまい、慌てて華子から顔を逸らした。

「あの……白井先生……」

「はい？」

操が顔をそむけたまま、ほそほそと呟く。

「……あたしも『一条先生』のサイン、もらっていいですか……？」

操がおずおずと学生鞆の中からもう一冊、付箋のない綺麗なまんみーを取り出した。

「はい、もちろんです！」

華子は満面の笑みで、操からまんみーを受け取ったのだった。

つづく

●「らのけん！」シリーズ掲載号一覧

★2014年

- G A文庫マガジン7月24日配信号…らのけん！ 2 夢の最終選考編
 G A文庫マガジン9月合併配信号…らのけん！ 3 はじめてのおつか……うちあわせ編
 G A文庫マガジン10月27日配信号…らのけん！ 4 思い切って告白しちゃうぞ編
 G A文庫マガジン11月27日配信号…らのけん！ 5 ペット攻めたり編
 G A文庫マガジン12月25日配信号…らのけん！

★2015年

- G A文庫マガジン1月22日配信号…らのけん！ 6 はじめての発売日編
 G A文庫マガジン2月26日配信号…らのけん！ 7 かんこれ、始めました編